

※日付は日本は旧暦、世界は新暦

西暦和暦 ○は改元日	国内の動き	長州藩(萩藩)の動き	徳山藩の動き	世界の動き
一八五三 嘉永六	<p>六・三 アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー、浦賀(神奈川県横浜須賀野市)来航、国書受理を要求。 六・二二 十二代将軍徳川家慶死去。 七・二三 ロシア使節プチャーチン、長崎来港、国書受理を要求。 八・二八 幕府、品川台場の築造に着手。 (安政元年五月頃竣工) 一〇・二三 徳川家定十三代将軍就任。</p>	<p>六・八 萩藩、ペリーの浦賀来港に際し、武蔵国大森海岸(東京都品川区付近)に出兵。ペリー退去に伴い一旦兵を解く。 一一・一四 萩藩、相模国西浦賀(神奈川県横浜須賀野市)から腰越八王子山(同鎌倉市)に至る西南海岸一帯の警備を命じられる。益田親施を総奉行に任命。</p>	<p>この年 一一： 萩藩と共に浦賀の警備に就く。 江村彦之進、藩校興讓館常居生となる。句読師に試用される。 二： 萩藩に警衛地引き渡しの一、二年延期を懇請するが応ぜられず。 三： 信田作太夫、筑後国(福岡県)柳川に遊学。柳川藩士加藤喜右衛門の塾に入り槍術を学ぶ。すぐに塾頭となる。 四： 大浦山台場(神奈川県)の警備にあたる。 (一八五八年まで)</p>	<p>三： 太平天国の乱。 一〇： クリミア戦争勃発。</p>
一八五四 嘉永七	<p>一・二六 ペリー、浦賀に再来港。 三・三 日米和親条約調印。 八・二三 日英和親条約調印。</p>	<p>三・二七 吉田松陰、金子重輔とともに下田でアメリカ艦に密航を謀るが失敗、捕らえられ江戸へ護送される。 四： 萩藩、警衛地の一部を四支藩に分担させる。</p>	<p>この年 本城清、小姓役を辞し、後に興讓館の訓導役となる。 浅見安之丞、興讓館句読師となり大島流槍術指南役教授を兼ねる。</p>	
安政元 (一一・二七)	<p>一一・二二 日露和親条約調印。</p>	<p>八： 坪井九右衛門、椋梨藤太ら保守派が藩政に復帰。</p>	<p>三： 兼崎橙堂、砲台監察兼大砲方に任命される。 三・一三 萩藩より徳山藩受け持ちの台場の授受を行う。実際の終了は翌年。</p>	
一八五五 安政二	<p>一・一八 幕府、洋学所設置に着手。 七・二九 幕府、長崎に海軍伝習所設置。 一〇・二 安政の大地震。 一〇・九 阿部正弘、老中首座を退き、堀田正篤(正睦)が筆頭となる。 一一・二三 日蘭和親条約調印。</p>	<p>この年 本城清、江戸に行き安積良斎の門に学ぶ。 江村彦之進、徳山藩の歴史をまとめた「徳山略記」を編集し九代藩主毛利広篤(元蕃)に献上。</p>		

<p>一八五六 安政三</p>	<p>二・二一 幕府、設立準備中の洋学所を審書調所と改称。 八： 初代駐日領事ハリス、下田にアメリカ領事館を開設。</p>	<p>二・二一七 萩藩初の洋式軍艦丙辰丸進水。</p>	<p>一〇： 児玉源太郎の父、半九郎没。 二二・二八 毛利広篤、元蕃と改名。</p>	<p>三： クリミア戦争終結。 一〇： アロー号事件勃発。</p>
<p>一八五七 安政四</p>	<p>一・一八 幕府、審書調所開講。 四・一 幕府、築地講武所内に軍艦教授所(後の軍艦教練所)開設。</p>	<p>一一・一五 吉田松陰、松下村塾開塾。</p>	<p>一： 本城清、徳山に戻る。 三・一 興讓館で西洋流砲術の授業開始。 一一・一六 江村彦之進、江戸に遊学。安積長斎の門に学び、後に塾長となる。 一・二三 児玉次郎彦、児玉半九郎の跡を継ぐ。 二・二九 書家浅見巢雲死去。</p>	<p>五： インド北部で反乱。(インド大反乱) 九： ムガル帝国皇帝、イギリスに降伏。</p>
<p>一八五八 安政五</p>	<p>一・八 幕府、通商条約の勅許奏請のため、老中堀田正陸に上京を命じる。 二・九 堀田正陸参内。条約勅許ならず、四月二十日江戸へ帰る。 四・二三 彦根藩主井伊直弼、大老就任。 六・一九 日米修好通商条約調印。(無勅許) 七・五 尾張藩主徳川慶勝、前水戸藩主徳川斉昭、福井藩主松平慶永(春嶽)ら不時登城の罪を問われ隠居、謹慎となる。(安政の大獄の始まり) 七・六 徳川家定死去。 七・八 幕府、外国奉行を創設し海防掛を廃止。 七・一〇 日蘭修好通商条約調印。 七・一一 日露修好通商条約調印。 七・一八 日英修好通商条約調印。 八・八 孝明天皇、戊午の密勅を水戸藩徳川斉昭に下し幕府を非難。 九・三 日仏修好通商条約調印。 九： 攘夷派の公家や志士の肅清が始まる。(安政の大獄) 一〇・二五 徳川家茂十四代將軍就任。</p>	<p>一・二二 十三代藩主毛利敬親の養女銀姫と、徳山藩八代藩主毛利広鎮の十男で敬親の養子となっていた定広(のち元徳、以後元徳と表記)結婚。 六・二〇 相模の警衛を免ぜられ兵庫の警備を命じられる。 七・一九 敬親、一門八家に封内一和を元とし、死生一処と心得るべき旨を諭す。 八・五 中山忠能、正親町三条実愛の名で密旨を敬親に送り、国事周旋を依頼する。 八・一七 萩藩校明倫館で学んでいた寺嶋忠三郎、松下村塾に入塾。</p>	<p>四： 兼崎橙堂、高島流砲術皆伝を受ける。 八・一 射術場が桜馬場から舞車の砲術場の中に所替えとなる。 八・三〇 悪疫流行のため消毒用養生湯を設ける。 一〇・一八 兼崎橙堂、遠石の浜辺で西洋流打方の演習を行う。 一二・一六 飯田忠彦、京都町奉行に呼び出され拘禁、後江戸に送られる。 この年 井上唯一、成年式を行う。</p>	<p>六： 天津条約調印。 八： インド統治法公布。インドがイギリス王国の直接統治となる。</p>

<p>一八五九 安政六</p>	<p>五・二八 幕府、六月以降神奈川、長崎、箱館三港でロシア、フランス、イギリス、オランダ、アメリカとの自由貿易許可を布告。 六・二〇 幕府、開港場での舶来武器の自由購入を大名、旗本、藩士に許可。 七・六 ドイツ人医師シーボルト、長崎に再来港。</p>	<p>五・二六 吉田松陰、萩を出立、江戸へ護送される。 五・二七 吉田松陰、高水村を通過、寺嶋忠三郎、これを見送る。 一〇・二七 吉田松陰、江戸伝馬町の獄で処刑。</p>	<p>七： 児玉源太郎、興讓館に入学、島田蕃根の感化を受ける。 一・二〇 長府藩主毛利元運八男、平六郎（のち元功）、毛利元蕃の養嗣子となる。 この年 本城清と江村彦之進、九州をめぐる各藩の情勢を視察する。</p>	
<p>一八六〇 安政七</p> <p>万延元 (三・一八)</p>	<p>一・二三 咸臨丸アメリカへ出航。軍艦操練所教授勝海舟ら搭乗。 三・三 大老井伊直弼、桜田門外で水戸浪士ら十八人の襲撃を受け惨殺。（桜田門外の変） 五・六 咸臨丸、品川に帰航。 六・一七 日葡修好通商条約調印。 九・二八 孝明天皇第二皇子祐宮（後の明治天皇）、親王宣下を受け睦仁の諱名を賜る。 一〇・一八 孝明天皇妹和宮、降嫁の勅許が下る。 一一・一四 日プロシア修好通商条約調印。 この年 箱館に西洋築城法による五稜郭竣工。</p>	<p>二・二〇 萩藩、銃陣編成の改革を行い、新たに洋式銃陣の制を採用。 三・二八 長井雅楽の「航海遠略策」を藩の方針とし公武周旋にあたる。 五・三 敬親、領内巡見の際須々万に入る。大庄屋城藤四郎宅に二泊。 五・一五 長井雅楽、上京して「航海遠略策」を正親町三条実愛に説く。 七・二 長井雅楽、江戸に行き元徳に事情を告げ、老中久世広周に「航海遠略策」を上申。 一：頃 敬親、元蕃、元純、参勤で江戸に行く。 一：頃 敬親、老中に建白書提出、公武周旋の將軍内示を得る。</p>	<p>二・一六 飯田忠彦、刑期を終え解放されるが「大日本野史」などの著作を伏見奉行に没収される。 五・二七 飯田忠彦自刃。（六十三歳） この頃 江村彦之進、大野直輔、小川潜蔵、山陰山陽畿内の諸國をめぐる。その後、萩藩校明倫館に遊学。小田村文助（楯取素彦）、土屋弥之輔、周布政之助らと国事を議論。一〇月に徳山に帰る。 一・二八 孝女お米の碑を浦石往還北側に建立、撰文は昌平校教官安積良斎。 この年 本城清、平六郎（元功）の近侍を兼ね文学の師範となる。 浅見安之丞、小姓役となる。 河田佳藏、河田鉄藏の養子となり跡を継ぐ。 一・一五 平六郎（元功）、就右と改名。 この頃 江村彦之進、安芸国（広島県）の金子徳之助の門に学ぶ。四月に徳山に帰る。</p>	<p>一〇： 英仏連合軍北京入城 一〇： 北京条約調印。 一一： リンカーン、アメリカ大統領就任。</p>
<p>一八六一 万延二 文久元 (二・一九)</p>	<p>五・二八 水戸浪士ら江戸高輪東禅寺のイギリス仮公使館を襲撃。 一〇・二〇 和宮、京都桂御所出発、江戸に向かう。 一一・一五 和宮、江戸到着。 一二・二二 幕府遣欧使節、イギリス軍艦で品川を出発。福沢諭吉搭乗。</p>	<p>三・二八 長井雅楽の「航海遠略策」を藩の方針とし公武周旋にあたる。 五・三 敬親、領内巡見の際須々万に入る。大庄屋城藤四郎宅に二泊。 五・一五 長井雅楽、上京して「航海遠略策」を正親町三条実愛に説く。 七・二 長井雅楽、江戸に行き元徳に事情を告げ、老中久世広周に「航海遠略策」を上申。 一：頃 敬親、元蕃、元純、参勤で江戸に行く。 一：頃 敬親、老中に建白書提出、公武周旋の將軍内示を得る。</p>	<p>一：頃 浅見安之丞、元蕃に従い江戸へ行く。</p>	<p>三： イタリア王国成立。 四： アメリカ、南北戦争勃発。</p>

一八六二 文久二	<p>一・一五 老中安藤信正、水戸浪士らに襲撃され負傷(坂下門外の変)</p> <p>二・二一 和宮、將軍徳川家茂と結婚。</p>	<p>一・二三 高杉晋作、幕府の使節に随行して上海に行く。</p> <p>二・二三 敬親、元蕃と元純を招き周旋の依頼を受けたことについて意見を問う。二七日兩名依存なしと回答。</p> <p>三・三 長井雅楽、京都で江戸の状況を朝廷に報告するが「航海遠略策」は尊攘派から非難の聲が高まる。</p> <p>四・一 元徳、江戸から京へ上る。</p> <p>四・一一 久坂玄瑞、十二箇条からなる長井の弾劾書を萩藩重役に提出。</p> <p>五・二 敬親、將軍上洛を促す建白書を幕府に提出。</p> <p>五・三 敬親、元蕃に帰国の際京都に留まり補佐を依頼。</p> <p>五・五 萩藩、「航海遠略策」を却下。</p> <p>六・五 敬親、尊攘派の排斥を受けた長井雅楽に帰藩、謹慎を命じる。</p> <p>七・二 敬親、元蕃京都に到着。</p> <p>七・六 萩藩、藩議で藩の方針を「公武合体論」から「破約即時」攘夷論に変更する。徳山藩他支藩も同席。</p> <p>九・二 萩藩、イギリス商人より外輪式蒸気船壬戌丸を購入。</p> <p>一〇・一八 京都で久坂玄瑞を発起人とする松陰慰霊祭開催。寺嶋忠三郎祭主を務める。</p> <p>一一・一 寺嶋忠三郎、高杉晋作を盟主とする御桶組に参加。</p> <p>一一・一三 高杉晋作ら、攘夷貫徹のため盟誓して横浜外館の襲撃を計画。</p> <p>一二・二二 高杉晋作ら、品川御殿山に建築中のイギリス公使館を焼打ちする。</p>	<p>春 江村彦之進、赤間関(下関)の白石正二郎を訪ね薩摩藩の情勢を探る。</p> <p>五・四 江村彦之進、児玉次郎彦、兼崎橙堂ら徳山山立、六月四日江戸到着。</p> <p>六・一〇 元蕃、江戸山立。浅見安之丞、江村彦之進、児玉次郎彦、河田佳蔵、井上唯一ら、元蕃に従い、京都に行く。</p> <p>七・二 元蕃、京都着。</p> <p>七・三 元蕃、京都の警備にあたる。(翌年一月まで)児玉次郎彦、江村彦之進、河田佳蔵、周旋方となる。</p> <p>八・二九 兼崎橙堂、京都で死去。(四十二歳)</p> <p>九・二二 信田作太夫、遠藤貞一郎、勅使として江戸に行く姉小路公知に従う。</p> <p>一一・二〇 朝廷より元蕃に、敬親とともに参内するように内意。</p> <p>一一・二三 元蕃、朝廷への一層の忠節を家中に諭す。</p> <p>この年 児玉次郎彦、有栖川熾仁親王の命を受けて飯田忠彦の「大日本野史」の一部「諸家系図」を伏見奉行から取り返す。</p>	<p>九： プロイセン宰相ビスマルク「鉄血政策」。</p>
一八六三 文久三	<p>一・一五 徳川慶喜入京。</p> <p>二・二五 幕府、攘夷の勅旨奉承決定。</p>	<p>二・二六 長井雅楽、自刃。</p> <p>二・二二 敬親、萩へ帰る。元徳は京都に留まる。</p>	<p>一・二三 元蕃参内、天顔を拝する。</p> <p>一・二九 元蕃、徳山へ帰る。児玉次郎彦、元蕃に従い国に帰り大目付役となる。京都留守居役を兼ねる。</p>	<p>一： アメリカ、奴隷解放宣言。</p> <p>八： カンボジア、フランスの保護領となる。</p>

三・四 徳川家茂、上洛。  
三・五 孝明天皇、徳川慶喜に庶政委任の奏請を勅許。

三： 新撰組結成、京都守護職配下に属す。

四・二七 幕府、十方石以上の大名に三ヶ月交代で京都警衛を命じる。

四・二〇 徳川家茂、攘夷期限を五月一日とする旨を天皇に奏上。

五・二〇 尊王攘夷派の公家、姉小路公知、京都朔平門外で暗殺。(朔平門外の変)

七・一 薩摩藩、鹿児島湾に侵入したイギリス艦隊と交戦。(薩英戦争)

八・二八 京都において政変勃発。(八月十八日の政変) 会津、薩摩両藩、中川宮ら公武合体派が、宮中の尊攘派を一掃する。

四・二六 敬親、萩城を去り山口に移る。(山口移鎮)

五・二〇 赤間関(下関)を通過するアメリカ軍艦を砲撃。(第一次馬関攘夷戦)

五・二二 井上聞多(馨)、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔(博文)、野村弥吉(井上勝)、秘かにイギリス留学に旅立つ。

五・二三 赤間関を通過するフランス軍艦を砲撃。(第二次馬関攘夷戦)

六・一 アメリカ軍艦に赤間関の砲台を報復攻撃される。

六・五 フランス軍艦に赤間関の砲台を報復攻撃され、同砲台を占領される。

六・七 高杉晋作、奇兵隊を結成。

八・二八 八月十八日の政変により、長州藩は京都堺町御門の警備の任を停止され、三条実美、三条西季知、四条隆調、東久世通禮、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉の七卿が山口を目指す。

春 江村彦之進、徳山に帰り興讓館の訓導役、海防局長、会計局長をつとめ、諸般の制度改革、軍備拡充、財政整理を行う。

春 信田作太夫、京都に上り周旋方をつとめる。御所の護衛をする御親兵となる。

三： 浅見安之丞、京都に上り御親兵となり堺町御門を警備する。

三： 井上唯一、徳山へ帰る。

三・二七 元蕃、就右(元功)ら萩に行き敬親と協議。

四・九 元蕃、就右(元功)ら奈古村の海岸を視察、一日徳山に帰る。

四・一一 浅見安之丞、孝明天皇の石清水行幸の折、三条西季知の警固をする。

この頃 河田佳藏、就右(元功)に従い、萩との間を行き来する萩詰めの留守居役や御蔵本両人役見習いをつとめる。

この頃 本城清、藩校拡張にともない政府両人役と藩校教授(学館長)を兼務。その後政府両人役から代官役となる。

五： 井上唯一、長州藩が赤間関で外国船を砲撃した際、元蕃から元徳の護衛を命じられる。

六： 尾玉次郎彦、五月二〇日の朔平門外の変により、元蕃の命で京都に上る。

八・九 西洋流銃陣の訓練場完成。

八・二六 浅見安之丞、八月十八日の政変により徳山に帰り急報をもたらす。

八： 井上唯一、八月十八日の政変により尊王攘夷派の公卿七人が山口に下る際、元蕃から警衛の任務を命じられる。

八・二七 三条実美、三条西季知、四条隆調、壬生基修、錦小路頼徳五卿の乗船が徳山浜崎港に入港、陸路三田尻に向かう。

九： 井上唯一、京都や大坂間を往来、久坂玄瑞に従って京都の様子をうかがい雪辱のときを待つが、果たさず徳山に帰る。

<p>一八六四 文久四 元治元 (二・二〇)</p>	
<p>一・一五 徳川家茂、上洛。 三・九 徳川慶喜ら、参与を辞し参与会議解体。 三・二五 幕府、徳川慶喜の将軍後見職を免じ禁裏守衛総督に任じる。 四・二〇 朝廷、幕府に萩藩処分、沿岸防備強化などの勅を下す。 五・二〇 徳川家茂、江戸へ帰る。 五・二一 幕府、神戸に海軍操練所を設置、頭取勝海舟。 六・五 新撰組、京都三条池田屋に集結した討幕派を襲撃。(池田屋事件) 七・一一 佐久間象山、京都で暗殺。 七・一九 長州藩兵、京都御所の諸門を襲撃するが、会津、薩摩両藩兵などの幕府軍に敗れる。 (禁門の変、蛤御門の変) 七・二三 朝廷、幕府に長州追討の勅命を発する。 七・二四 幕府、長州藩征討の勅命を受け、西南二十一藩に出兵を命じる。(第一次幕長戦争 第一次長州征討とも)最終的には三十五藩となる。</p>	<p>一・二三〇 朝廷、徳川慶喜、松平容保、松平慶永、山内信豊、伊達宗城に朝議参与を命じる。(翌年一月二三日島津久光にも命じる。)</p>
<p>二・二四 村田蔵六(大村益次郎)、兵学校教授役となり、山口明倫館で西洋兵学の講義を行う。 五・一〇 村田蔵六(大村益次郎)の建議で、製鉄所を阿武川川上の亀ガ瀬に設置。 六・五 池田屋事件で吉田稔麿ら闘死。 六・ 敬親、長府・徳山・清末・吉川と協議。益田親施・福原元偶・国司親施の三家老の上京を決定。長州藩兵上京を開始。 六・二四 井上聞多(馨)、伊藤俊輔(博文)帰国、山口到着。 七・一九 禁門の変で久坂玄瑞、来島又兵衛、寺嶋忠三郎ら戦死。</p>	
<p>一・一九 須万村紙、五箇村紙の他所売りを厳禁。 一・ 長野保蔵以下五十三名と木村金右衛門以下八十三名で農兵銃陣小隊二隊を組織。 二・二一 長州藩の方針に従い領内の一里塚を撤去。 三・九 岡田原に待屋敷町(江戸町)ができ、江戸からの帰国者に割り与える。 四・ 兵制改革。 五・ 諸士を館邸に招集して軍令を下す。</p>	<p>二二： 児玉次郎彦、興讓館助訓役と学寮長を兼務。 二二・二五 本丁惣門、桜馬場東詰、辻丁出口、新丁頭、鐘楼丁上乾、上御弓丁に関門を新設、昼夜番人を置いて通行人を取り締まる。 二二・二八 興讓館に甲冑着用故実と算術測量科目を開設。 二二： 御仕置銀の制度を再興、年末から毎年銀十貫目を貯蔵することとする。</p> <p>この年 海岸防備のため大砲の铸造を計画、領内有志が銅器を献納。铸造された大砲は権現社(熊野神社)その他の要地に配置される。 浅見安之丞、就右(元功)の侍臣となり学業指導を命じられる。 井上唯一、元蕃の命により、高杉晋作が結成した奇兵隊に入り赤間関(下関)に留まる。</p>
<p>七・一九 禁門の変で徳山藩士松野頼(信行)、先山倫之丞(直倫)ら戦死。 七・二九 児玉次郎彦、大坂で禁門の変を聞き徳山へ帰る。 この頃 河田桂蔵、先鋒隊元締役となる。 七： 浅見安之丞、興讓館の訓導役となる。</p>	<p>七： 太平天国滅亡。</p>

一〇・二二 西郷隆盛、征長軍参謀に任命される。  
 一〇・二三 征長軍、大坂城で軍議、一月一八日に攻撃開始を決定。  
 一一・一二 西郷隆盛ら、周旋のため岩国来訪、三家老自刃等を実行し幕府に寛大な処分を請うよう求める。  
 一一・二六 征長総督徳川慶勝、広島国泰寺に到着。  
 一一・二八 徳川慶勝、国泰寺で長州藩三家老の首実検を行う。開戦を延期。

一二・二七 征長軍、解兵令を発し長州征討終了。

八・四 宇和島藩主伊達宗城、幕府と長州藩の周旋のため、使僧二人を遣わすが不調に終わる。  
 八・五 英・仏・米・蘭の四カ国連合艦隊、赤間関(下関)を砲撃。  
 八・六 同艦隊陸戦隊上陸し、下関砲台を占領。  
 八・一四 高杉晋作ら、イギリス艦に赴いて和議を講じる。  
 八・ 益田親施、福原元偁、国司親施の長州藩三家老、禁門の変の責任者として徳山に幽閉。  
 八・ 幕府、長州藩への武器、米穀などの移出を禁止。

九・二五 井上聞多(馨)、俗論党に襲われ瀕死の重傷を負う。  
 九・二六 周布政之助、自刃。  
 一〇・三 敬親、萩城に戻る。  
 一〇・ 藩政の主導権が保守派(恭順派・俗論派)に移り尊王攘夷派への弾圧が厳しくなる。  
 一〇・二一 幕府への恭順、謝罪のため奇兵隊など諸隊の解散を命じる。  
 一一・二七 長州藩の諸隊と五卿が長府へ到着。功山寺を五卿の滞在所とする。尚義隊、忠勇隊がこれを警護し、その他の諸隊は功山寺とその周辺の各寺院に分宿。同日、三田尻に駐屯していた忠勇隊も長府に至り、諸隊に合流。  
 一一・一九 徳川慶勝、吉川経幹に、毛利敬親・元徳父子の伏罪書提出、山口城の破却、三条実美ら五卿の他藩移転を命じる。  
 一一・二五 高杉晋作、筑前(福岡県)より赤間関(下関)へ帰還。  
 一一・二五 敬親父子、萩城を出て天樹院に蟄居。  
 一二・一五 長州藩より総督府へ、藩主父子からの謝罪文書提出。  
 一二・一五 高杉晋作、赤間関(下関)功山寺で拳兵。  
 一二・一六 高杉晋作ら、赤間関の新天地会所を襲撃、占領。  
 一二・二五 長州藩政府、高杉らの追討決定。

八・八 国司親施、徳山着。澄泉寺に監禁される。  
 八・九 河田佳蔵、仲間とともに恭順派の当職、富山源次郎宅を襲うが失敗。岩国藩に逃げるが捕まり、浜崎の獄に囚われる。  
 八・一一 本城清、職を奪われ学館内に幽閉。  
 八・一一 江村彦之進、職を奪われ家に幽閉。  
 八・二二 江村彦之進、東関門近辺で暗殺。(三十三歳)  
 八・二二 児玉次郎彦、自宅で暗殺。(二十三歳)源太郎が幼いたため児玉家は家名断絶となる。  
 八・二二 浅見安之丞、井上唯一、浜崎の獄に囚われる。  
 八・二四 福原元偁、徳山着。  
 八・二五 益田親施、徳山着。一六日総持院に監禁される。  
 八・二七 本城清、浜崎の獄に囚われる。  
 八・ 信田作太夫、浜崎の獄に囚われる。

一〇・二四 井上唯一(享年二十三歳)、河田佳蔵(享年二十三歳)処刑。  
 一一・二一 益田親施、国司親相、徳山で自刃。  
 一一・二二 福原元偁、岩国で自刃。

九： 第一イン  
 ターナシヨナル、ロンドンで  
 結成。

一・四 征長軍総督 広島を出立。

慶応元  
(四・七)

四・二二 幕府、長州再征を発令。  
五・一二 幕府、紀州藩主徳川茂承を第二次征長軍の先鋒総督に任命。  
五・一六 徳川家茂、長州藩再征討のため江戸を出発。

五・二八 英・仏・米・蘭の四国、下関海峡の自由通行および日本内乱不干渉を決議。  
閏五・三二 徳川家茂、上洛参内し長州藩再征を奏上。  
六・二四 西郷隆盛、京都で坂本龍馬と会談し、長州藩の武器の代理購入の要請を受諾。

九・二二 徳川家茂、長州藩再征の勅許を受ける。

一・二二 高杉晋作、伊藤俊輔(博文)、赤間関伊崎の会所を襲撃。  
一・二六 大田・繪堂の戦い始まる。高杉晋作らの諸隊軍勝利。  
一・二七 高杉軍、小郡の勘場を襲撃。  
一・三〇 山口に鴻城軍が組織され井上聞多(馨)が総督となる。

一・二六 鴻城軍、佐々並の政府軍を破る。  
一・二八 敬親、萩から山口に移る。  
二・二二 藩内の対立収束、高杉晋作らが主導権を握る。  
三・一五 諸隊再編成。軍制改革を行う。  
三・二三 藩の方針を「武備恭順」に決定。

五・一三 桂小五郎(木戸孝允)、山口で敬親に拝謁。幕府に対抗するため、政事堂の下に一般政務を管掌する国政方、財政民政を管掌する国用方を置き、桂は国政・国用トップから諮問に与る用談役に就任。  
五・一三 村田蔵六(大村益次郎)、近代洋式軍隊の創設にあたる。

閏五・二〇 敬親・元徳父子、支藩藩主、吉川経幹ら会議開催。幕軍が攻めて来たときは周防長門二州一致してことにあたると決議。  
七・二二 四支藩藩主山口に集会上坂の命に ついて対策を協議、辞退する。  
七・二二 井上聞多(馨)、伊藤俊輔(博文)、海援隊並びに薩摩藩の斡旋により、長崎グラバー商会から鉄砲を購入。

一・二四 信田作太夫(四十一歳)、本城清(四十一歳)、浅見安之丞(三十三歳)、新宮浜の付近で縊殺。

四： 軍事・海防を総督する軍制方新設。  
四・一五 農町兵の有志により山崎隊を編成、大野直亮(直輔)を総督に任命。従来の中島流の砲術や騎射を廃し洋式の銃砲を採用。

六・一七 元蕃、政府の改革に着手。

六・二〇 山崎隊の屯所を一時徳応寺に定める。

六・二三 徳山、岩国両支藩主に上坂の幕命あり。

六・二九 児玉次郎彦の罪が許される。

七・一三 児玉家家名復興。源太郎、児玉家の家督を継ぎ中小姓となり禄高二五石を与えられる。

七・二〇 兵制改革。銃陣に統一し練兵塾を開設。

九・三 元蕃、祐綏神社の臨時祭を行い藩内の肅清を誓う。また家臣に対し一致協力するよう論告書を出す。

九・九 九月三日の論告書を受け、大野直亮(直輔)以下家臣たちが連名で血判。明治元年二月まで総勢二二〇名に及ぶ。

九・一七 山崎隊規則制定。

九・二八 領内の農民町民の兵で八個小隊と砲隊一隊を編成。うち二個小隊は徳山、一個小隊は遠石、栗屋辺、砲隊は徳山に屯集。

四： アメリカ南北戦争終結。  
四： アメリカ大統領リンカーン暗殺される。



<p>一八六六 慶応二</p>	<p>一一・七 幕府、彦根藩以下三藩に出兵を命じる。</p>	<p>一一二一 桂小五郎(木戸孝允)と西郷隆盛、坂本龍馬の斡旋により京都薩摩藩邸で薩長台従の密約を結ぶ。(薩長同盟)</p>	<p>一〇・八 内訌後の政治相談人として萩藩より竹中織部が派遣。      一〇： 児玉源太郎、馬廻役、禄高一〇〇石を許される。      一〇： 十五歳以上五十歳未満の男子は非常の際小銃を携帯して出動できるよう用意を命じられる。また学館を病院にする手配を行う。      一一一 九月編成の農民町民兵を二団に分け、徳山中央より東を東衛何番小隊、西を西衛何番小隊とする。      一一： 足軽、中間を以て第一大隊(二三六人)編成。      一一・一八 児玉源太郎、練兵塾入塾。      一二・二五 遠石町東端入口および富田川崎町西端入口に関門を新設。      一二・二六 八代藩主毛利広鎮、徳山邸で死去(八十九歳、大成寺に葬る)。      一： 夫卒による白砲隊(四十二人)を編成。      二・六 惣門番所前に目安箱設置。</p>
	<p>四・四 大久保利通、長州征討の非を論じ薩摩藩の出兵を拒絶。      六・七 幕府軍、大島郡に進撃、第二次長州征討(四境戦争)開戦。      六・二三 芸州口、小瀬川口で戦闘開始。      六・一六 石州口で戦闘開始。      六・二七 小倉口で戦闘開始。      七・一八 広島藩主浅野茂長、岡山藩主池田茂政、徳島藩主蜂須賀斉裕、連署して征長の非と解兵を幕府、朝廷に建言。      七・二〇 十四代将軍徳川家茂、大坂城で死去。      七・二一 薩摩藩主島津茂久と父久光、幕府の失政を挙げ征長解兵を朝廷に建言。      八・一六 徳川慶喜、参内して征長解兵を請い勅許を得る。      八・二〇 幕府、徳川家茂死去により停戦の朝命を請う。</p>	<p>八・二一 小倉口の戦いで小倉城を攻略、小倉藩兵は城を焼いて逃れ小倉城陥落。      八・七 芸州口の戦いで長州軍芸州へ進撃、幕府軍は広島に退却。</p>	<p>六・一一 禁門の変に際し幕府に捕らわれた江戸藩邸の邸員三十四人(うち士分九人)、広島藩を経て岩国吉川氏に渡され、徳山に帰着。      六・二六 金剛山頂に斥候番所を新設。      白砲隊など小瀬川口へ出陣。(七月一三日帰陣)この頃 山崎隊、小倉口の戦いに陣出。      八： 練兵塾を献功堂と改称。      この頃 諸兵を敵愾軍と総称し諸隊の号を朝氣隊(諸士隊二個小隊)、武揚隊(徒士一個小隊)、順祥隊(御持弓二個小隊)と定める。</p>

	<p>九・二 幕府軍艦奉行勝海舟、敵島で広沢真臣、井上聞多(馨)と会見、停戦を協約。大島口芸州口、石州口の戦闘終結。</p> <p>一一・二五 徳川慶喜十五代将軍となる。</p> <p>一二・二五 孝明天皇崩御。</p>		<p>九・三 児玉源太郎、朝気隊加入を命じられる。</p> <p>九・二〇 練兵塾規則制定。</p>	
<p>一八六七 慶応三</p>	<p>一・九 睦仁親王、踐祚の儀を行い皇位に即く。(明治天皇)</p> <p>一・一一 遣欧特使徳川昭武らバリ万国博覧会参加のため横浜を出発。</p> <p>一・二三 小倉藩降伏、講和が成立。</p> <p>三・二九 岩倉具視らの入京許される。</p> <p>四： 土佐藩、坂本龍馬の亀山社中を同藩の海援隊とし、坂本龍馬を隊長に任命。</p> <p>五・二二 土佐藩士、板垣退助・中岡慎太郎ら、薩摩藩士小松帯刀・西郷隆盛らと京都で倒幕拳兵を密約。</p> <p>六・二二 土佐藩士、後藤象二郎・坂本龍馬ら、薩摩藩士大久保利通・小松帯刀・西郷隆盛らと会谈、大政奉還などを内容とした薩土盟約を締結。</p> <p>六： 坂本龍馬「船中八策」を後藤象二郎に示す。</p> <p>七： 大久保利通ら、幽居中の岩倉具視とともに王政復古を計画。</p> <p>八： 遠江(静岡県)・三河(愛知県)・尾張国(河)で「ええじゃないか」の大衆乱舞起こる。冬にかけて江戸以西の本州、四国各地方へ拡大。</p> <p>一〇・二三 後藤象二郎ら、前土佐藩主山内豊信の大政奉還の建白書を幕府に提出。六日広島藩主浅野茂長同建白書提出。</p> <p>一〇・六 大久保利通、品川弥二郎、岩倉具視、中御門経之、王政復古策を協議。</p> <p>一〇・二三 岩倉具視、薩摩藩主に討幕の密勅、長州藩父子に官位復旧宣言を渡す。</p>	<p>四・二四 高杉晋作死去。</p> <p>九・二八 薩摩藩と長州藩、拳兵倒幕を約す。</p> <p>二〇日広島藩も賛同。</p>	<p>二・二七 山崎隊、小倉城陣番として出張。(四・一〇日帰藩)</p>	<p>五： オーストリアリハンガリア帝国成立。</p> <p>九： マルクス『資本論』刊行。</p>

<p>一八六八 慶応四</p>	
<p>一・一三 鳥羽・伏見の戦い。旧幕府軍敗退。戊辰戦争始まる。  一・一六 徳川慶喜、大坂城脱出。一二日江戸到着。  一・一七 新政府、徳川慶喜征討令を発す。  一・一五 新政府、各国公使に王政復古を傳達。  一・一五 天皇元服。  一・一七 新政府、三職七科の制を定める。  二・三 天皇、親征の詔を発布。  二・三 新政府、職制を改め三職八局の制を定める。  二・三 総裁有栖川宮熾仁親王を東征大総督とする。  二・二二 徳川慶喜、江戸城を出て上野寛永寺大慈院に屏居。</p>	<p>一〇・一三 徳川慶喜、在京十萬石以上の諸藩の重臣を二条城に招集し、大政奉還について諮問。  一〇・一四 徳川慶喜、大政奉還上表を朝廷に提出。  一〇・一四 正親町三条実愛、長州藩父子に討幕の密勅を渡す。  一〇・一五 朝廷、徳川慶喜に大政奉還を勅許。  一一・一三 京都町奉行「ええじゃないか」を禁止。  一一・一五 坂本龍馬、中岡慎太郎、京都河原町近江屋で京都見廻組に襲撃され坂本は即死、中岡は一七日死亡。  一二・九 朝廷、王政復古の大号令を発す。小御所会議で徳川慶喜に辞官納地を命じることと決定。幕府廃止、有栖川宮熾仁親王が総裁となり新政府樹立。  一二・一二 徳川慶喜、京都二条城を退去し大坂入城。</p>
	<p>一二・八 朝廷、敬親・元徳父子、長府・徳山清末三支藩主の官位を復し入京を許可。</p>
<p>二・二〇 元功、英国留学の勅許を得る。</p>	<p>一〇・一八 就右、元功と改名。  一一・二五 元功、元蕃の名代として長州軍の総督として軍を率いて富海を出発。  一一・二九 長州軍、摂津国打出浜(兵庫県芦屋市)に上陸。  一二・ 興讓館に聖廟落成。  一二・一九 元功、山城国粟生の光明寺に着陣。  一二・二三 元功、入京。  一二・二六 元功、参内。  一二・ 四熊宗庵(直方)、徳山藩に出仕し兵隊病院惣管をつとめ箱館戦争に従軍。</p>

<p>明治元 (九・八)</p>	<p>三・六 大総督府、三月五日の江戸城総攻撃を命じる。  三・一三 勝海舟、西郷隆盛会談。  三・一四 勝海舟、西郷隆盛再度会談。江戸開城に合意。  三・一四 天皇、紫宸殿で五箇条を誓約。(五箇条の御誓文)  三・一五 旧幕府の高札を撤去し、新たに禁令五条を定めて掲示。(五榜の掲示)  三・一八 神仏混淆を禁じる。以後廃仏毀釈運動が起る。  三・ 新政府軍「宮さま宮さま」(品川弥二郎作詞)に併せ進軍、都風流「トコトンヤレ節」として流行。  四・一 江戸城開城。徳川慶喜水戸に退去。  五・三 奥羽二十五藩仙台で同盟。次いで会津、庄内、長岡など八藩も加盟。(奥羽越列藩同盟)  五・一五 新政府軍、上野の彰義隊を攻撃。(上野戦争)  七・一七 江戸を東京と改称。  八・一九 榎本武揚、旧幕府軍艦八隻を奪い品川を脱走。  八・二三 新政府軍、会津若松城を攻撃。  八・二七 天皇、一連の儀式を経て京都御所で即位の礼を執り行い即位を内外に宣下する。  九・八 明治と改元。一世一元の制を定める。</p>	<p>五・一 敬親、朝廷の命により上京。</p>	<p>三・三三 元功、兵庫から乗船し閏四月二九日ロンドン到着。  三・三三 東西両衛団を解散し山崎隊の定員を八〇人から三三〇人に増員。  八・七 敵愾軍を解散し献功隊を編成。  八・一六 新兵隊編成のため九月一五日を期限として隊員の募集を開始。  九・一 元功、留学中に家督相続の命を拝する。  九・二三 献功隊・山崎隊各一個中隊、総勢二〇〇人、秋田に出陣を命じられ徳山を出発。児玉源太郎、献功隊二番小隊半隊司令士として従軍。  一〇・一 献功隊・山崎隊三田尻問屋口よりイギリス艦に乗艦。  一〇・三 献功隊・山崎隊、宗藩の整武隊とともに三田尻を出発。  一〇・九 献功隊・山崎隊、秋田土崎港着。</p>	<p>一一： 敬親、「藩治職制」を布告する。</p>
<p>一〇・二三 天皇、東京に到着。江戸城を皇居と定め東京城と改称。</p>	<p>一・二・一五 榎本武揚ら蝦夷地を平定。総裁以下の諸司を置き五稜郭を本営とする。</p>	<p>一・一： 敬親、「藩治職制」を布告する。</p>	<p>一〇・九 献功隊・山崎隊、秋田土崎港着。</p>	<p>一〇・九 献功隊・山崎隊、秋田土崎港着。</p>

<p>一八六九 明治二</p>	<p>五・一 新政府軍、箱館および五稜郭を攻撃。 五・八 榎本武揚ら五稜郭開城。戊辰戦争終結。</p> <p>六・二 七 版籍奉還。各藩知事を任命（六月二五日） 六・七 公卿、諸侯の称を廃し華族とする。 六・二九 東京九段に東京招魂社を建立、鳥羽・伏見の戦より箱館戦争までの戦死者を合祀。 七・八 官制改定、神祇・太政の二官、民部・大蔵、兵部・刑部・宮内・外務の六省および侍詔院・集議院、開拓史などを置く。（二官六省の制） 七・二七 京都・東京・大阪の三府以外の府を県に改める。 八・二五 蝦夷地を北海道と改称。 九・一八 東京築地に海軍操練所を設立。 九・二八 徳川慶喜の謹慎を解く。</p> <p>一一： 諸隊の反乱おこる。</p>	<p>一・二〇 敬親、薩摩、土佐、肥前の藩主とともに版籍奉還を建白。</p>	<p>六・四 敬親隠居、元徳家督を相続。 六・一七 元徳、山口藩知事に任命。</p> <p>九・四 新政府の兵部大輔大村益次郎、京都で刺客に襲われ重傷。</p> <p>一一・五 大村益次郎死亡。 一一・一五 元徳、藩内の常備軍二〇〇名を御親兵として新政府に差し出す。 一一・二七 諸隊の号を廃し、常備軍を編成。 一一・三〇 常備軍から漏れた諸隊の兵が山口を脱する。（脱退騒動）</p>	<p>二・三〇 徳山村東川筋をはじめ領内諸村の空閑地や地味粗悪な畑地等に桑の栽培を奨励し公費で苗を頒給。 二： 藩治職制を改正、藩士の階級を合併して大夫・上士・中士上等・同下等・下士上等・同下等・準士の七等とする。 三： 養蚕取立を命じる。 四： 献功隊・山崎隊、北海道で戦う。 五・八 献功隊参謀の林与、蝦夷大川の戦いで戦死。（二十七歳） 五・二二 献功隊・山崎隊、箱館に入る。 五・二四 箱館において清水谷公考総督より感状を徳山藩兵に授与。 六・一 献功隊・山崎隊、東京に凱旋。 六・五 鳥羽伏見の戦い以来の戦功により、元蕃に永世賞典禄八千石を賜る。 六・二六 元蕃、徳山藩知事に任命。 七・二二 山崎隊、徳山に凱旋。 七・二〇 献功隊、徳山に凱旋。 八・一 児玉源太郎、兵部省御雇として土官。フランス式兵学修業を命じられ、京都二條川東第一教導隊に入隊。 九・一四 奥羽、箱館平定の戦功賞典として元蕃に三カ年、高五千石を賜る。 一〇・一七 藩邸の御城の呼称をやめ「徳山藩議事館」と改称、公職と家職を分離し職制の大改革を実施。 一一・四 東西二カ所の招魂場の東山一カ所への合併を命令し、場所の選定を献功隊・山崎隊中隊・新兵隊に命ずる。 一一： 源太郎、大阪兵学寮に移る。</p>	
---------------------	--	--	--	--	--

本年表は『徳山市史年表』（昭和四四年徳山市役所）、『徳山市史』（昭和五九年徳山市）、『児玉源太郎と近代国家への歩み展』（平成一三年周南市美術館）等を参考に作成しました。